

東洋女子歯科医学専門学校校長・宇田尚(第2報)

永藤 欣久

東洋学園大学 東洋学園史料室

旧制東洋女子歯科医学専門学校(以下、東洋女歯医専)の理事長と校長を長く務めた宇田尚(1881~1968)は、恩賜神農像と廟堂の湯島聖堂遷座(1943年)に際し、斯文会(聖堂)の担当理事であった。その実父、宇田廉平子直(1840~1906)は武蔵国六浦藩大参事の身分で新政府集議院に出仕し、欧化政策を進める政府中央を保守的な立場から批判した明四事件で下野国安蘇郡上永野村(栃木県鹿沼市)に逃れ、その地に隠棲した漢学者であった。

宇田廉平は国権主義が台頭する明治20年代に至って復権し、1888年、第一高等中学校(94年より第一高等学校)教授に就任、91年より陸軍幼年学校教授を兼務し、儒教的武士道精神に則った倫理学を講義した。廉平次男の系統の宇田俊一は海軍軍医から精神科医となり、その長女は歌人茂吉の長男、斎藤茂太に嫁した。以上が昨年の報告である。

廉平四男の宇田尚は湯島天神町に住む剣術指南家の叔父、宇田義房の養子となるが、身は栃木にあって尋常小学校卒業後は農耕、養蚕、薪炭の行商に従事し、廉平退官後の生計を担った。

1901年、野戦砲兵第2旅団野砲兵第16連隊に入営し、日露開戦(1904年)とともに旅団は乃木第3軍隷下となり、宇田尚は旅順要塞二〇三高地で速射野砲の運用(射程延伸)に功績があった(偕行社特報第9号日露戦役記念号;1936など)。この時の所属小隊長は後に財団法人東洋女歯医専協議員となる男爵井田磐楠で、一下士官の宇田が榊原昇造第3軍工兵部長の面識を得たのは井田らの推輓と推測する。榊原も後に同校協議員に遇され、その長男(第二次大戦終結時に陸軍参謀本部総務課長)は戦後、財団を改組した学校法人の理事、顧問となり、次男(三菱重工業航空機設計技師)は宇田の長女を娶った。

戦勝後の1907年、榊原昇造は北白川宮成久王(後、砲兵大佐)の近侍者として宇田尚を推し、宇田は宮内省雇員となる。次いで宮家を挟み美濃国元郡上藩主・子爵青山幸宜の知遇と信任を得た。青山と宇田の接点については昨年、本学会の森永正文が詳細な検証を加えている(森永、最後の郡上藩主青山幸宜公と東洋女子歯科醫學専門学校。郡上史談2015;147:5-12)。

青山幸宜は十五銀行頭取、日本鉄道取締役などを歴任した華族実業家である。宮家出仕の後、中央大学法学科(別科)を卒業した宇田は青山の下で実業家としての経験を積んだ。

これに金杉英五郎が加わる。金杉は日本耳鼻咽喉科学会の創設者、東京慈恵会医科大学初代学長として医史に名を留め、政界でも旺盛に活動した。本学資料における金杉の初出は、第一次世界大戦でドイツから輸入が途絶した医薬品の国産化が急務となり、金杉らが設立した大陸貿易株式会社の経営に宇田が参画した1917年である。同社は(ドイツ以外からの)医薬品輸入、我が国産物の輸出、北海道、樺太での薬草栽培を業務としている。金杉は1920年から財団法人化した東京歯科医学専門学校(現、東京歯科大学)の初代監事に就任し、歯科教育との接点が生じた。

1917年には、26(大正15)年から東洋女子と改称する明華女子が歯科医学講習所として開校している。専門学校に昇格後、文部大臣指定校化で躰いた同校を「動機は全く文部省(歯科医師試験附属病院)からの依頼」(宇田尚メモ。学校経営内容説明)により、26年に経営を引き受けたのが宇田、青山、金杉であった。

青山は子息で出羽国亀田藩主家養子の岩城隆徳を同校理事長に据え、自身は協議員、1928年から他界する30年まで校長を務めた。宇田は監事として実務を仕切り、役員に前述の軍、宮家関係者を迎え、28年に理事長、30年に校長の職を継承した。金杉は顧問として26年から他界する42年までその職にあった。